



を細分する区画のことです。

かつて、宜野湾には22の字があり、人びとの生活において、生活の基礎となる重要な存在でした。しかし、戦後の急激な社会変化に伴い、字としてのまとまりは、現在失われつつあります。そのため、最近では自分の育った字の由来や習慣について、知らない人が増えてきています。

そこで博物館では近年、市民のみなさまに自らの住んでいる字について考えていただく地域との連携企画展「字」展を開催しています。

今年で7回目になる「字」展の舞台は、市の南西部に位置する字嘉数です。嘉数は、さかのぼると、一六二三年に編纂された『おもろさうし』に、「かずもじくすく ねたてもじくすく（嘉数杜くすく 根立て杜くすく）」として登場する古い地名です。集落の北側には、地域のランドマークであり、嘉数高台公園として整備されたイーヌヤマ（上の山）があります。展望台に上

みなさんは、ご自分がお住まいの「字」の由来や習慣についてご存知でしょうか。この字とは、一九〇八（明治四一）年施行の沖縄県及島嶼町村制に伴い、成立した市町村

と宜野湾市周辺を一望することができそうです。戦前の嘉数のほとんどの人びとは農作業に従事する一方、その傍らではソーキ（ミーシヨーキ）などの竹細工作りが盛んで、首里・那覇辺りでは「嘉数ソーキ」として有名でした。

また、沖縄戦で被害を受けましたが、集落内を歩くと戦前の面影を感じる風景が残されています。例えば集落の人びとの共同の泉として利用されたアガリガーや、周囲をフクギで囲った昔ながらの印象を受ける家々を見ることができそうです。

博物館では3月8日（日）まで、「字」展「嘉数く根立て杜くすく」なよろらてつきし字く」を開催しております。みなさま、ぜひ博物館へお越し下さい。お待ちしております。



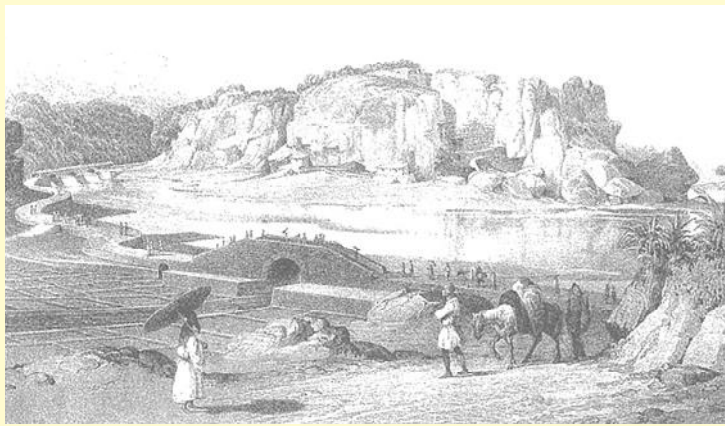
▶嘉数高台公園（イーヌヤマ） ▶嘉数のアガリガー

【お問合せ】市立博物館 ☎8700-93317
入館料無料となっておりますので、お気軽にご来館下さい。

茶ぐわーゆんたく

130

一枚の絵から記録をつなぐ



ハイネが描いた1853年当時の比屋良川河口周辺の景観 『ペリー提督遠征記』所収

近にあたります。

1702（元禄15）年に作成された『琉球国絵図』では、この場所は入江（湾）として描かれており、貿易船が出入りしていたといわれています。ハイネの絵ではなぜ、陸地になっているのでしょうか。

『球陽』によると、この石橋は左奥に見える牧港橋とともに、1735（享保20）年に建設されたようです。これらの記録から考えられるのは、かつて比屋良川下流の入江だったところが陸化したということです。橋の建設で河口付近が仕切られ、川から運ばれた土砂が長い年月の間に堆積した結果、陸地になったのです。

この低地は粘土質で、保水性のよい肥沃な土壌だったので、水田の立地にすぐれていました。1970年代前半までは稲作が行われていましたが、現在は水田のほとんどが埋め立てられ、市街地化しています。

ペリー一行は琉球との交渉のほか、様々な調査を行い、琉球の風景や人物、植物や鳥類、魚類など多くの絵を描いて記録しました。琉球王府は、ペリー一行の対応に苦慮したようですが、彼らによって作成された記録は、当時の琉球の姿を私たちに伝えてくれます。

『宜野湾市史』への問い合わせ

文化課 市史編集係（宜野湾市立博物館内）

☎870093317